

幼児期における自己統制とその規定要因の検討 (14)

—— 自己統制と愛他行動との関係を中心に ——

中 田 栄 (兵庫教育大・日本学術振興会)

〔目的〕 本研究は、幼児期における自己統制とその規定要因について、昨年度 (中田, 1998) に引き続き検討していく。本研究では、「状況理解」「遊びに対する能動性」「他者理解」「愛他行動」を取り上げ、自己統制と各要因との関係を明らかにする。

〔方法〕 (1)対象：15園の幼稚園に在籍する4歳から5歳のクラスの幼児を持つ担任の教師とし、725名の幼児についての評定結果を分析の対象とした。(2)手続き：担任の教師に質問紙を配布し、教師が幼児の行動評定を行った。(3)内容：観察記録、事例研究での記述を踏まえて項目を作成した。(1)従属変数：①自己統制 (計18項目), (2)独立変数：①愛他行動 (9項目), ②自己効力 (9項目), ③他者理解 (9項目), ④遊びに対する能動性 (9項目), ⑤状況理解 (9項目)。なお、評定は、“だいたいそう(4点)”から、“ほとんどない(1点)”までの4件法を用いた。

〔結果と考察〕 本研究の結果から、明らかにされたことは、次の5点に要約できる。①幼児の“自己統制”に対して、“愛他行動”と“状況理解”及び“遊びに対する能動性”からの影響が顕著であった。②“遊びに対する能動性”は、“自己統制”の規定要因であると同時に、“愛他行動”と“状況理解”を規定している要因でもあることが明らかにされた。③“共感性”と“自己効力”は、“遊びに対する能動性”を媒介として、間接的に“自己統制”を規定している要因であることが示唆された。④“共感性”は、“遊びに対する能動性”のほか、“愛他行動”にも強い正の影響を示していたことから、“遊びに対する能動性”と“愛他行動”を媒介として間接的に自己統制を規定している要因であることが示唆された。⑤“他者理解”は、“愛他行動”を媒介として、間接的に自己統制を規定することが示唆された。